

編集後記

3月11日の大震災、津波、そして原発事故によって、2011年という年は記憶されていくであろう。復興、そして、生活のあり方そのものへの問いは、なおも続く。

本年報は、わたしたちのこの1年間の研究活動の成果である。

「グローバリゼーション」をテーマとして長年にわたって共同研究を行ってきた。今回もグローバル化の進展の中で、ローカルな場面の変化をどのようにとらえるかについての考察を行った。この点については、タイトルの「グローカル化」で表現したつもりである。研究室の構成スタッフの交替も一段落し、新たなメンバーを迎え、これまでの研究蓄積を生かしながら新たな展開を図っていくことを目指していきたい。

今回のゲスト研究会は、市橋秀夫埼玉大学教授に報告をお願いした。イギリス史を専門とされているが、これまでの研究活動の中でイギリスのスポーツ研究者との交流、在外研究先の大学での授業の内容等をふまえて、スポーツ史研究の現状を中心に、数多くの視点を提示していただき、われわれのスポーツ研究にとって示唆に富む内容であった。ご多忙の中、掲載原稿の校正作業にもご協力をいただいた市橋先生にはあらためて感謝申し上げたい。

『研究年報』が最初に刊行されたのが1982年。今回で第30号、30年目の節目を迎える。

総目次の「前文」でいくつかふれたが、20年以上「同時代史」として関わってきたものの個人的な感慨のような私見をここで述べることをご容赦いただきたい。

私自身は、1980年代後半から共同研究に加わるようになった。メンバーとして参加した当初のことをふり返れば、現在と比べて、研究会の頻度ははるかに多く、個々の研究発表とともに、随時開催される「時事問題研究会」のように、共同して国内外におけるスポーツの状況を多様につかむことにどん欲であった。また、研究発表にあたっては、司会担当のスタッフに（どんなに遅くとも）発表の1週間前には、発表の概要を資料とともに伝え、同時に、討論の進め方を確認する打ち合わせを行っていた。現在では「物理的に無理な相談」と心の中で言い訳をしつつも、研究、発表に対して丁寧に取り組む当時の姿勢について、もう一度思い起こす必要があると考えさせられる。

これまでと同様、渡辺助手と関根助手による定例研究会の実施や編集実務をはじめとする有形無形のサポートによって、ここに今年度の研究年報の完成を見た。記して謝意を表したい。

本年報は、文部科学省科学研究費「スポーツのグローバル化とコミュニティにおけるスポーツの変容に関する研究」（研究代表者：尾崎正峰、課題番号：20500538）の研究成果の一部である。

(尾崎 正峰)

一橋大学 スポーツ研究

Vol.30

グローカルの過程とスポーツの変容

2011年10月1日 発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室

〒186-8601 東京都国立市中2-1

TEL 042-580-8270

www.rdche.hit-u.ac.jp/~sports/
